

映画

「キクとイサム」と私が歩んだ道 1

歌手 高橋 エミ

水木洋子のオリジナル脚本を名匠・今井正が映画化、昭和34(1959年)。占領時代の落とし子であるアフリカ系黒人米兵との混血児姉弟が、好奇の視線と差別の中を、明るく生きてゆく様を活写した良心作。主人公の二人に起用された映画初出演の実際の混血児の存在感あふれる演技が感動を呼ぶ。実年齢の倍近い老婆に扮する北林谷江の「しげ婆さん」も逸品。(びあシネマクラブ日本映画編2002～2003より)



映画のストーリー

東北の貧しい山村で、ひとりのお婆さん(北林谷江)が、11歳の少女のキク(高橋恵美子)と、9歳の少年のイサム(奥の山ジョージ)という、黒人と日本人の混血の子ども二人を育てている。お婆さんの娘が東京で生んだ子どもたちなのである。キクもイサムも活発で陽気で、村の子どもたちと遊びまわっているが、自分たちだけ、肌の色が黒いために遊び仲間からときどきひどいことを言われるのにはらをたてることが多い。とくにキクは、女の子として、醜いと言われることが辛い。混血児をアメリカに養子としてあっせんする仕事をしている協会の人々がやってきて、二人の写真を撮って行き、その結果、イサムだけは養子に行くことになったが、キクは残される。

親しい近所の人たちが、アメリカは人種差別がひどいというがどうだろう、と議論し、お婆ちゃんはどう考えていいかわからないで悩む。イサムがひきとられて行く日、イサムは行きたくないと言い、キクも泣いた。

キクはあいかわらず陽気だが、その陽気さのなかに、ときどきヤケ気味のふるまいが見られるようになる。学校の先生は彼女を励ますが、キクには将来が信じられない。お婆ちゃんは悩んだ末、キクは尼さんになるのがいいと言う。お釈迦さまは頭の毛がちぢれているから、キクとおなじ人種で、まんざら関係がないわけではないという理屈である。

キクはある日、首をくって自殺しようとする。しかし体が重くて縄が切れ、命は助かった。お婆ちゃんは彼女に、自分が百姓の仕事を教えるから、百姓として生きてゆけと励ます。そのとき彼女は初潮を経験した。百姓の支度をして畑に向う彼女を近所の男の子がからかうと彼女は、もう自分は大人だからお前たちにかまっていられない、と胸をはって言う。お婆さんは北林谷栄。温くて真情にあふれていて最高の名演である。

水木洋子は、このシナリオを書くために、まず主演のキクを演じる混血の少女をさがすことから始めた。多くの候補者のなかからプロデューサーが選んだのは、頭が良さそうで悲しそうな表情をした子だったが、水木洋子はあえてその逆のタイプの子を自分でさがし出し、その子のじっさいの性格に合わせてシナリオを書いた。結果はこれが成功で、キクを演じた高橋恵美子は一見陽気な態度の中に、差別を強く感じとっている者の悲しみと怒りを率直に表現した。

水木洋子のシナリオは、山村の人々の生活をユーモラスに描いており、今井正の演出はこれに豊かな抒情味を加えていた。ヒューマニズムの香り高い作品である。
(佐藤忠男著「日本映画300」(朝日文庫)より)

2012年は今井正監督の生誕100年。

キク役の高橋エミさんは現在歌手、65歳の人生を歩む。高橋さんは占領時代の落とし子であるアフリカ系黒人米兵と日本女性の混血児として立川で生まれた。未熟児のエミはおばあさんの乳首に食らいついた。おばあさんはこれなら育てられる・・と思えば十條に連れてき、ここで育てられた。親はどうしたか知らない。小学生になり、色が黒い！と言葉の暴力を浴びせられ何度も喧嘩になった。

小学6年生の時に、プロデューサーの市川きいちさんが家に来た。映画、キク役の下見に来たのだ。その時は、プロデューサーと監督の目には、かなわなかったようだった。水木先生はキク役の子供は逞しい子が良いと考えていたそう。その後、プロデューサーとやさしそうな水木先生が家にやってきた。先生は私が気に入ったようだ。6、7人でオーディションを受け、カメラテストをしたら今井監督が水木さんに負けた……と言って、私に決まった。

映画の撮影中、いいかげんな気持ちでやっていたら、水木先生から「あんた達にいやなことをやらせる気はないのよ！」と言われ、先生の本気が判った。それから本気でやる気になった。撮影時、今井監督はいつもやさしく教えてくれた。いつもそばで心を引き出してくれた。今井先生は押し付けのない人で、「エミちゃんなら、どう思う？」がいつもだった。半年ぐらい映画をとって、大人になったような気持ちになった。

水木先生にはそれ以降、親子のようにお付き合いいただいている。濃密な関係です。映画の後、好きだった音楽の世界に入った。伴淳三郎さんから役者への声がかかったがお断りした。

結婚についても考えた。水木先生は「自分に正直にないなさい！」といわれた。自分と同じ苦労(色が黒いこと)を子供に経験させたくない……思い、いまだ一人です。